

—或るユダヤ人金融家から見た日露戦争、そしてその後の「アジアと日本」—

田畑則重**著

『日露戦争に投資した男』

(2006年、新潮新書)

評者：奥田 孝晴*

日露戦争は近代日本国家が経験した最初の本格的な帝国主義戦争であった。20世紀初頭の東アジアでは南下圧力を強めるロシアと、日清戦争以降朝鮮半島への支配を及ぼしつつあった日本との対立が激化し、朝鮮半島～南満州を舞台として戦端が開かれた。当時最強の陸軍国と見なされていた帝政ロシアの優位は誰が見ても明らかだと思われていたが、ロシア帝国内での革命の勃発と2年間の激戦のもと、日本は戦局を優位に進め、際どい“勝利”を勝ち取ったのだ。

しかしながら、この戦争は19世紀後半から進んだ欧米帝国主義列強間の勢力均衡再編が生み出した複雑な国際関係の中で戦われたもので、日本の薄氷の“勝利”は、単に2国間の戦闘の結果だけではなかった。とりわけ、ロシアの軍事的膨張とドイツの海軍力増強を前にして、従来の孤立外交に終止符を打ち、東アジアにおける対露けん制パートナーとして日本の利用価値を見出したイギリスと、中国大陸で利権分与に参加すべく「門戸開放」を国策に掲げていたアメリカ合衆国のコミットメントは、近代国家形成からまだ30余年しか経ていない日本にとって決定的に重要なものだった。(余談ながら、日露戦争を取り巻く国際関係はまったく複雑怪奇で、開戦から2ヵ月後には、日本の同盟国であるイギリスと、ロシアのそれであるフランスがドイ

ツと対抗するために手を握る[英仏協商]に至る。ヨーロッパ流国際政治とは、まったくドライかつシニカルである。)日露戦争はこうした列強間の合従連衡を背景とした、きわめて国際色の濃い本格的な帝国主義戦争であった。したがって、この戦争に関連した時空間もまた極めて大きく、歴史の表舞台に登場することはないものの、戦争の帰趨に重要な役割を果たした数多くの人々が存在していた。

本書はそうした人物の一人であるドイツ系ユダヤ人金融家ジェイコブ・シフに焦点を当てている。開戦とともにたちまちに底を突きかける国家財政を補うべく、日本はイギリスに戦費融資を申し込んだものの、先の南ア戦争で多額の出費を経験していたイギリスはこれを拒否、さらに信用に乏しい「二流帝国」発の外債の起債も難航する中で、当時アメリカで有力な投資会社であるクーン・ロエブ商会の持ち主として全米ユダヤ人協会の会長となっていたシフは日本の戦費を賄う最初の起債(6分利付公債1千万ポンド)の半分の引き受けに応じたばかりでなく、以後の日本の外債消化に尽力することとなった。この行為が国際金融界での対日信用を好転させ、以後起債が容易となる契機となった。日露戦争期間中、日本が起債できた外債総額はおよそ8200万ポンド(戦費総額の6割強)に達したが、それはシフの受け入れなくしては到底不可能だったのであり、その意味で、彼はまさに日露戦争勝利の「陰の立役者」の一人であった。

本書はシフがアメリカで事業を拡大し、有力な資産家となる事跡、そして日本への関わりを解説した第一部と、日露戦争後に訪日したとき自身が著した『シフ滞日記(Our Journey to Japan)』の第二部から成り立っている。前者においてはジェイコブ・シフなる人物がどのような経歴から特有の人生観、道徳観を作り上げていったかが理解できるばかりでなく、彼の事業拡大と日本の国策との複雑な関係が描かれており、この人物との関係を通して見える大日本帝

* 文教大学国際学部教授

** 文教大学情報学部准教授

国の政策の変容過程がうかがえる。また後者はシフが1906年2月から6月まで日本各地と朝鮮半島を訪れ、時の政府要人や財界の有力者などとの交流ぶりが日記の形として紹介されており、帝国主義国家としての体裁を急速に整えつつあった日露戦争後の日本社会のありようが映し出されている。当時の日本各地の風景や、あたふたと「脱亜入欧」にまい進する様子ともあいまって、20世紀初頭のこの新興国家の世相にも大いに興味をそそられる。本書の面白さの一つには、そうした時代状況が一人のユダヤ系アメリカ人の目を通して生き活きとよみがえっている点が挙げられる。

経歴からも明らかなように、シフは一流の起業家であり、商機を見出すことに長けていた。日本外債の引受けに率先して応じたのも、単に反ユダヤ主義から同胞を弾圧しているロシア帝国への敵愾心といった民族心情的な理由だけではなく、大陸計略に関わる諸利権への関与という経営的観点もまた大きく働いていた。その中でももっとも大きかったのがポーツマス条約で管理権を接取した長春～旅順間の東清鉄道支線（後の南満州鉄道）に関する利権である。彼は鉄道王ハリマンと協調してその経営権買収に動く（彼の訪日の真の目的は、この構想を実現することこそあったのだろう）のだが、この構想は小村寿太郎らの強硬な反対あって挫折し、結局、同鉄道は日本の独占経営となった。シフは日本政府の恩をあだで返すようなこの事態に激怒したものの終生日本への厚情を持ち続けた、と本書は言う。ただ、日本海軍の仮想敵がアメリカ海軍へと代わり、またアメリカでも排日運動が激化し、1907年には排日移民法が制定されるなど、日露戦争後の日米関係は次第に対立要因を含むそれへとシフトしつつあり、本書に描かれている日本要人のシフへの態度に見る微妙な変化は、こうした関係変化を象徴しているとも言えよう。

なお、日露戦争は帝国主義時代におけるダイナミックな国際関係の再編過程で行われた戦争

であると述べたが、ここで言う「国際」の中からは植民地下にあったアジアなど第三世界民衆の存在がしばしば抜け落ちてしまうことに、私たちは留意すべきだろう。この戦争がイギリスやアメリカからの有形無形の支援によって遂行されたのは紛れも無い事実だが、それは桂・タフト秘密覚書（1905年7月）で日本がアメリカのフィリピンにおける排他的支配権を認め、また改訂日英同盟（同年8月）でイギリスのインド支配を全面的に支持する姿勢を明確にしたことも、一つの理由であった。言い換えれば、日本がロシアとの戦争を継続できたのは、英米帝国主義のアジア民衆への植民地支配を容認することを担保としたからであった。そうした構図は、日露戦争最大の犠牲者とも言うべき当時の朝鮮半島1500-1700余万人の運命がより鮮明に“証明”している。既にこの戦争中から日本は大韓帝国政府に干渉を強めていた。そして、3度にわたる日韓協約を経て、1910年には同地を完全に植民地化するまでに至り、そこに暮らしを営んでいた人々に「日帝三十六年」の惨禍をもたらすこととなった。本書にあるシフ訪日記には06年5月上旬に済木浦（仁川）、漢城（京城）、釜山を訪れた折のことが書かれているのだが、その印象は「（日本の）統監、もしくは代理人の立会いなしに外国人との交際を禁じ」られた皇帝を戴いていた当時の韓国に対しては、「日露戦争終結後、韓国を保護国にした日本人が支配し、混乱から秩序を作り出そうとしている」と、総じて冷淡である。当時、稀有な国際的感覚を持ち合わせたこの人物が、大国の権力者たちによる迫害を経験してきたユダヤ人とシンクロナイズしたに違いない朝鮮半島民衆の「痛み」に対して、果たしてどのような思いを抱いていたかを知りたいとは思うのだが、それを本書に期待するのは、「無いものねだり」の類なのかもしれない。

ともあれ、本書を通じて私たちは国際政治の冷徹さと共に、時代の中に生きた様々な人々の生き様に触れることで、歴史という「物語」の

ダイナミックな展開に肉薄することが出来、またそこから「アジアと日本」の現在や未来をも

考える手立てを得ることも出来るだろう。特に若い世代に勧めたい良書である。